

昭和48年暮れに答申のあった19%の診療報酬引き上げは、齋藤邦吉厚相によって1月に告示され、2月から実施された。しかし、答申に書き込まれた病院と診療所の格差の変更は認められず、厚相の当初の諮問案どおりとされた。このため支払い側が反発し、中央社会保険医療協議会(中医協)は実質的に8月まで審議が中断した。再開された中医協では、石油ショックによる狂乱物価に対応するために診療報酬の引き上げが合意され、10月から16%引き上げられた。年2回を合わせて、35ポイントの引き上げとなった。

ここ数年くすぶっていた租税特別措置法による保険診療収入の28%課税問題が本格的に取り上げられ、政府税調は10月に出した中期税制答申で、その見直しを政府に求めた。12月に、田中内閣のあとを受けて発足した三木内閣は、28%課税問題の見直しを政権の課題に掲げ、大蔵省に検討を命じた。大蔵省が具体的な見直し案をまとめたため、日本医師会は12月末、対抗措置として、厚生省関係の全審議会、協議会からの委員引き揚げを実施した。

武見会長は4月の代議員会で、圧倒的多数で10選された。

● 診療報酬引き上げを告示

齋藤邦吉厚相は1月21日付で診療報酬の改定を告示し、2月1日から19%の引き上げが実施された。しかし、引き上げの内容は中医協答申に従わず、ほぼ諮問案のままであった。

支払い側は「明らかな答申無視で、我々は重大な決意を持つ」と齋藤厚相を非難する声明を発表した。中医協は、厚相からのもう1つの諮問である診療報酬のスライド制について審議をしなければならなかったが、支払い側は中医協の再開に応じなかった。

● 中医協また審議中断

中医協は3月29日に3か月ぶりに開かれた。しかし、支払い側は「中医協無視の厚相のもとでは中医協の正常な運営は期し難い」と審議入りに難色を示した。診療側は「スライド制の実施が遅れている分、もう一度診療報酬引き上げの必要がある」と主張して対立した。今後の審議方針や次回日程を決められないまま散会し、8月1日までまた約4か月間、再び審議中断した。

● 第55回定例代議員会

第55回定例代議員会は4月1, 2日の両日, 日本医師会館で開かれた。初日は役員選挙が行われ, 武見会長が圧倒的多数の支持で10選されたほか, 役員はすべて無投票で選任された。第2日には会務報告や予算, 事業計画の可決, 決算の承認があり, 中医協の審議中断を非難し, 解散を求める決議を採択した。

□ 役員選挙結果

議長(無投票)

当選 高橋 貞助(埼玉)

副議長(無投票)

当選 木下 真澄(和歌山)

会長

当選 武見 太郎(東京) 164票

次点 近藤 芳朗(東京) 11票

副会長(無投票)(定員2名)

当選 松川 金七(宮城)

熊谷 洋(東京)

理事(無投票)(定員8名)

当選 森藤 靖夫(岡山)

依田 省吾(山梨)

渡辺 一男(山形)

渡辺 一九(兵庫)

石川 侃(高知)

川原田圭一(三重)

寺島 清七(長野)

原田 正(宮崎)

常任理事(無投票)(定員7名)

当選 藤沢 正輝(東京)

花輪 音三(東京)

松浦 鉄也(東京)

重田 精一(群馬)

成田 至(栃木)

小池 昇(東京)

斎藤 修(埼玉)

監事(無投票)(定員3名)

当選 出口 一郎(福井)

菊池 勝夫(北海道)

青柳 成利(福岡)

□ 決議

中央社会保険医療協議会は, 現在の構成では医学の学術的進歩を阻止し, 人類の未来福祉に対し, 重大な障害を与えている事実を自覚していない。

よって, 速やかに公約に従ってこれを解散し, 人間主体時代における医療福祉の創造を可能にする新たな出発をなすべきである。

右決議する。

昭和49年4月2日

第55回日本医師会定例代議員会

● 三師会会長が自民党に申し入れ

武見会長は, 歯科医師会の中原実会長, 日本薬剤師会の石館守三会長と連名で4月10日, 橋本登美三郎自民党幹事長に「参院選挙前に中医協を解散して適切, 具体的な善後策を講じろ」と申し入れた。斎藤邦吉厚相は14日, 遊説先の金沢市で記者会見し, 「物価の急激な上昇もあるので, 診療報酬は年内にも再改定の必要があるだろう」と発言した。7月に予定された参院選挙に向けて, 医師会の要望に因應の姿勢を示そうとしたのであった。

● 三師会が全国大会

日本医師会は, 日本歯科医師会, 日本薬剤師会と共催で6月7日に, 「医療危機の根源 - 中医協解体要求全国大会」を東京・九段会館

医療危機の根源—中医協解体要求全国大会



中医協解体要求の貫徹を誓う三師会全国大会

で開いた。大会には1,500人が参加して、中医協の解体を要求する宣言を採択し、診療報酬の大幅引き上げ要求を決議した。自民党から、江崎真澄幹事長代理、田中正巳政調副会長、橋本龍太郎社会部会長が出席した。

●診療報酬を16%再引き上げ

中医協は8月1日、4か月ぶりに開かれた。出席した斎藤厚相は「狂乱物価のため、診療報酬の再改定が緊急に必要であることを痛感している。近く諮問したいが、適切な意見を聞きたい」と、諮問なしの検討を要請した。

中医協は8月中に4回の会合を開いて、支払い側、診療側双方が意見を交換した。意見が出尽くしたところで9月7日、厚相は平均16%の診療報酬引き上げ案を中医協に諮問した。内訳は病院18.6%、診療所13.8%で、病院と診療所の格差は4.8%とされた。中医協は9月18日、諮問案を認めるとの答申を厚相に出した。

答申には、公的病院の建設費用に公的負担を考慮する。国公立病院の部屋代差額徴収は廃止するよう努める。歯科の差額徴収

問題は特別小委員会を設けて検討する、など、支払い側が求めた意見がつけ加えられた。

16%の診療報酬引き上げは10月1日から実施された。2月の19%と合わせて年2回、合計35ポイントという大幅な引き上げとなった。

●保険料率の弾力条項発動

診療報酬の大幅引き上げで、政管健保の財政が苦しくなった。厚生省は、昭和48年(1973)の健保法改正で実現した弾力条項に基づいて、10月11日、社会保険審議会(社保審)に保険料率を5/1,000引き上げて77/1,000としたいと諮問した。

社保審は、引き上げ幅を圧縮して4/1,000とする答申を出し、政管健保の保険料率は11月から76/1,000に引き上げられた。

●歯科の差額徴収問題

中医協の答申が触れていた歯科の差額徴収問題について、斎藤厚相は10月9日、中医協に、歯科の差額問題についての検討を求める諮問をした。

●租税特別措置28%問題

政府の税制調査会(東畑精一会長)は10月4日に総会を開いて、保険診療収入の課税所得率を28%としている租税特別措置法の見直しを求める答申をまとめ、東畑会長から田中角栄首相に手渡した。答申は、租税特別措置法の28%課税を改めて、代わりに「必要経費率」と「特別控除率」の組み合わせにすることを提案した。必要経費率を実態に近い水準に改めて一律とするほかに、収入に応じて特別控除を行うという考え方が示された。租税特別措置法の28%課税の規定は昭和29年(1954)に法制化されたが、昭和40年代に入って、不

公平税制の代表として問題にあげられるようになっていた。政府税調は1月に社会保険診療報酬課税特別部会(部会長・東畑精一会長)を設けて、見直しの検討を続けていた。

日本医師会は10月15日の全理事会で、「政府税調の答申は、日本の医師の人道主義を否定し、政治におけるヒューマンズムをなくす方向を志向している」と批判する声明をまとめて、発表した。

● 審議会からの委員総引き揚げ

金脈問題で11月末に退陣表明した田中角栄首相のあと、12月9日に就任した三木武夫首相は、政権の課題の1つに社会的な不正の是正を掲げ、租税特別措置法の28%問題の是正を政権の課題にした。首相は、大平正芳蔵相に28%課税問題の見直しを指示した。

大蔵省は具体的な見直し案をまとめた。必要経費率と特別控除を合わせて、

- 保険による診療報酬収入が1,500万円以上は現行と同じ72%
- 1,500万円超～3,000万円以下は62%
- 3,000万円超～5,000万円以下は57%
- 5,000万円超は52%

というものであった。

日本医師会は12月25日の緊急常任理事会、27日の緊急全理事会で対応を協議し、緊急対抗措置として、中医協をはじめ厚生省関係の18の審議会、協議会から医師会の委員を全部引き上げる方針を決定、取り扱いを武見会長に一任した。武見会長は27日、すべての委員の辞表を一括して厚相に提出した。

自民党は12月26日の総務会で昭和50年(1975)度の税制大綱を決定したが、そのなかで、「政府が次期診療報酬改正と同時に、この特例の改正を実施できるように、適切な措置を講じる」と書いて、事実上の見送りとする方針を決めた。だが、翌27日、政府税調(小倉武一会長)は、大蔵省案を「適当な案だ」と評価して実施を求める答申をまとめ、首相に提出した。

武見会長は28日に記者会見して、「医師税制に手をつけることは医師の公共性を否定するものだ。それなら休日診療所や当番医、学校医は総辞退する。医師も、週休2日制や8時間労働をとっている世間並みの生活に戻る戦術をとる」と語った。

医制百年記念式典(11月21日、東京・千代田区の帝国ホテル)
厚生省主催による医制百年記念式典が、天皇・皇后両陛下の御臨席のもとに盛大に挙行された。写真は、御言葉を述べる天皇陛下。

式典には、田中首相、前尾繁三郎衆院議長、河野謙三参院議長、村上朝一最高裁長官らをはじめ、国会議員、政府関係者、医歯薬関係者など約700人が参列、先人の偉大な業績を偲ぶとともに、今後の国民医療の飛躍的發展を期し、一層の努力を誓った。

